

説 教 『心もとない復活証言から』山本 護 牧師
聖 書 イザヤ書 54：7～10／ルカによる福音書 24：1～12

復活は、古代世界の敬虔な弟子でさえ受容できるものではなかった(ルカ 24:11)。女たちから始まる復活証言(24:9～10)を読み、目を瞑って味わうと「小さな穴がダムを決壊させる」警句が思い浮かぶ。女たちの心もとない証言が、使徒らの聖霊降臨を招来し(使徒 2:3)、それが世界各地へ広がって行くイメージ(2:4)。復活が明らかにされるほんの小さな「穴」は、夜明け前、未だ暗い世の片隅で開いた。

女たちは「週の初めの日の明け方早く、準備していた香料を持って墓に行った(ルカ 24:1)。「わたしを葬る準備をしてくれた(マタイ 26:12)」とイエスに言わしめた香油注ぎの女が連想される。あの時も弟子は、善行を口実に(26:8～9)、イエスの死に背をむけた。ところが女たちは、イエスの死を抱え、闇の中を墓へ急いだ(ルカ 24:1)。霧散した弟子らは再び集まり(24:9)、死を悼みつつ「教え」の終焉を感じていた。また、これからどうしたものか、と思案していた。学んだ「教え」の延長線上には、復活は生じない。復活を受容することで、学んだ教えが鮮烈に輝くことはあっても、その逆はない。

墓の遺体は消失し、女たちは呆然となる(24:3～4)。すると「輝く衣を着た二人の人がそばに現れた(24:4)」。装いからしてどうやら天使らしい。「婦人たちは恐れて地に顔を伏せる(24:5)」。恐ろしくとも顔を伏せることは光の拒絶ではないのか。つまり、女もまた男とは違った意味で、生命の本質を目の当たりにすることはない。天使は「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ(24:5～6)」と告げ、イエスの言葉を思い出すよう促した。

女たちは、復活されたイエスに出会うことはなかったが、「十字架につけられ、三日目に復活する」と語っていた師の言葉を思い出した(24:7～8)。暗い死の淵に沈められていた彼女らは、小耳にはさんでいたイエスの言葉に(9:21～22)、新しい生命の鼓動を予感した。女たちは胸にざわめきを覚えながら墓から帰り、一部始終を知らせた(24:9)。しかし使徒たちにとっては、世迷い言に過ぎなかった(24:11)。

女たちの名も報告されている(24:10)。なかでも「マグダラのマリア」は、イエスに七つの悪霊を追い出してもらった女(8:2)。「悪霊」とは被造物である人間を引き裂き、抑圧し、絶望へ陥れる、反創造の力。マリアはイエスによって、七つもの悪霊から解放され、一人の神の子とされていた(マ 8:15)。女たちが最初の証人となりえたのは、イエスによって解き放たれる「復活」の疑似体験をしているからか。復活とは禍々しい超常現象ではない。私たち自身が「神の子とされる霊を受ける(8:15)」こと。永遠と結びついた現在という渚にあって、神以外の何物からも支配されない「神の子」になること。

「わずかの間、わたしはあなたを捨てたが、深い憐れみをもってわたしはあなたを引き寄せる(イザヤ 54:7)。「神に捨てられる(マルコ 15:34)」ほどの闇から、またイエスの死を抱え続ける女たちの闇から、御許に引き寄せられ(イザヤ 54:7)、もはや神とのつながりは揺らぐことはない(54:10)。そんな復活は、徐々に明らかになる。挫折したペトロからも道がつきそうだったが、この時は空振りした(ルカ 24:12)。



【おまけのひとこと】

十字架と復活 あの時 一度きりの出来事ではあるが 一人ひとりの日々のどこかに現れる
あの時より昔から 闇と光はあり続け 永遠にあり続ける 永遠は静寂というより 運動と変容なのか